コレンテ　vol. 46　n.413　　aprile　2025

CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

＊　私のアマルコルド（前編）＊

～ イタリアでのサバティカル ～

入（いり）　治彦（はるひこ）

●日本イタリア会館

私が日本イタリア会館のイタリア語講座に初めて通ったのは、20 歳の頃になる。当時は齊藤泰弘先生がフィレンツェ大学の留学から帰国したばかりだったかと思う。それから数えるとかれこれ 49 年になる。色々お世話になったし、牧師という職業柄、東京、滋賀、京都、兵庫、大阪、京都と転勤となったが、ここ 25 年は京都勤務だったため、毎週月曜日はイタリア会館に通うことができた。月曜日が休日というのは、理髪店と牧師くらいかなと思う。プロテスタントの牧師がどうしてイタリアにと思われる方もいるだろう。というのも小学生の頃はフェラーリやランボルギーニ、ギア・マングスタなどが好きで、カーデザイナーになりたいなと思っていた。その辺からイタリアの歌や映画に興味は広がっていったように思う。

●サバティカル

旧約聖書には、神が 6 日天地創造のために働いた後、7 日目に休まれ、安息日というのが始まったと記されているが、畑を 6 年使ったら、 7 年目に休ませる安息年というのもある。そこから大学などではサバティカルと言って、10 年間働いたら 1 年在外研修というか、充電期間がもらえる制度があるかと思う。私は伝道師、副牧師を 3 つの教会で務めた後、開拓伝道で生まれた伝道所に主任牧師となって働いた。10 年間そこで働いた後、次に赴任する教会の招聘の声がかかったのが 1 年半後だったため、先輩の牧師が「10 年働いたら 1 年充電してきた方がいい」と薦めてくれた。私は行くのなら、イタリアがいいと思った。というのも、大学院で旧約聖書学を専攻していて、真面目な学生ではなかったものの、ゼミの指導教授の野本真也先生が歴史批評に加えて文芸学的解釈を重視する立場から、ポール・リクールやロラン・バルトの本に加えて、ウンベルト・エーコの『記号論』なども紹介してくれたからだ。何か専門と趣味の世界が近く感じるようになったし、その 10 年後にはエーコの書いた『薔薇の名前』が出版され、ショーン・コネリー主演の映画にもなり、一時期世界的にもヒットした。

【8 月ペルージャに着いたその日の晩　街の広場で中世のお祭りをしていた】

●ペルージャ

私は 1997 年 7 月から 1998 年 3 月までを予定し、ペルージャ外国人大学に 2 ヶ月、ボローニャ大学に 5 ヶ月の予定でイタリアに出かけた。イタリアに行くのは 4 度目だったが、短い旅行とは違って日常的なイタリアを味わうことができた。ペルージャはイタリア中部の町であり、人口 13 万人のウンブリア州の州都、アッシジまで 15 キロくらいのところにある中世の面影の残る町である。今でこそサッカーの中田英寿選手やバレーボールの石川祐希選手の活躍でよく知られるようになっている。そこでは、コンドミニアムのようなところに住んでいた。

最初に驚いたのは、トイレの便器がリチャード・ジノリだったこと。日本でいうならば差し詰め「たち吉」の便器を想像していただいたら良い。また、気候的にはペルージャは、軽井沢と同じ海抜 500 メートルくらいのところにあるので、ヨーロッパの避暑地と言ってもいいところだった。マンションのベランダに出ると、風がいつもそよ風であんな気持ちのいい風はそれまで経験したことがなかった。

そこで夏といえども、足が冷えて困ったことがあり、シャワーを浴びてもおさまらないので、浴槽にお湯を入れ温まっていたら、大家のおばさんがドアをどんどん叩く。何かと思って腰にタオルを巻いて裸のまま風呂を出てドアを開けると、おばさんが物すごい剣幕で、私の耳を引っ張って、「シャワーを浴びた上、その上風呂にまで入って、なんというガスの無駄使いをするのだ！タンクの水までなくなってしまったじゃないか！」と言って怒りをぶつけてきた。私はひたすら謝ったが、空気と水はただのような日本とは全く違うことを思い知らされた。

しかし、それから 2 週間後、こんなこともあった。マンションの前をウロウロしながらブザーを何度も押す男性二人がいた。大家のおばさん、おじさんも出て行かないので留守なのかなと思い、私が出て応対すると、その二人は「〇〇はいないのか。〇〇を呼んでくれ」という。私はおばさんのところへ行って、お客さんがきていますと言うと、シーっというポーズで「二人ともいないと言ってちょうだい。家主が家賃を請求に来たから」と頼まれた。その通りのことを大家と思しき二人に告げると、怪訝そうな顔をして、マンションの周りをしばらくうろうろしてから帰って行った。二人が退散したことをおばさんに伝えると、老夫婦は喜んで、それから私に「accommodate」おくつろぎくださいと言う意味の紙を渡して、これからは自分たちの部屋にいつ来てもいいし、テレビも好きなように見ていい。日曜日の昼にはいつもおいしいパスタを作ってあげるという、それまでとは見違えるような待遇になった。そして、元シェフで今は年金生活をしているおじさんがノルチャ風パスタを作ってくれた。ソーセージと言うよりミートボールを潰したようなサルシッチャとイタリアンパセリをクリームであえたタリアテッレを出してくれた。これは絶品だった。おばさんは本場仕込みのフォカッチャを作ってくれたり、自分の畑で取れたイチジクやトマトを持ってきてくれたりした。

【ペルージャ外国人大学授業の後ジェラテリアで】
（後列左から2番目が筆者）

●ペルージャ外国人大学

ペルージャ外国人大学では、チュニジア人、ルーマニア人、トルコ人、オーストリア人、ドイツ人、アメリカ人、オランダ人、ギリシャ人の正教会の神父と学生、インド人のカトリックの神父とシスター、ベネズエラ人、韓国人、日本人が同じ教室にいて、知り合いになった。

別のクラスのブルガリア人神父は朝大学に来ると庭にあったイチジクの実をとっては食べ、これは私の朝食だと言っていた。同じクラスのギリシャ人学生は、朝からジェラートをたくさん食べていたので、「すごいね」と言ったら、正教会神父の方がギリシャの夏はいつも40度を超えるので、朝食

としてアイスクリームは変わったことではないと言っていた。東京音楽大学大学院を修了した女性は、イタリアの「アニマツィオーネ」の研究をして論文を書いたと言っていた。それは学校や様々な文化教育活動を陰で支える奉仕活動だと教えてくれた。

授業中、私が日本人だとわかると「日本人なら指圧というものを教えてくれ」と言われた。「親指と人差し指の間のヒレの部分を押したら、食べ過ぎた後の消化が早くなる」と教えてあげたら「何もない時、そこを押したら食欲が湧くのか」と言うクロアチア人の男の子がいて教室中が大笑いになってしまった。

ペルージャでは、隣のフロアにたまたまプロテスタントの信徒の高齢女性がいて、彼女の教会に連れて行ってくれた。キーボードやエレキギター、ドラムを使った若い人が比較的多く雰囲気は福音系だった。でも、結構親切にしてくれて、2 ヶ月後そこを去る時には、寄せ書きをした聖書をプレゼントしてくれた。

そうそう、マンションの隣の部屋に住んでいた日本人は、大学のドイツ語の教師で、ゲーテやニーチェがグランドツアーでやってきたイタリアにも興味があると言っていた。彼は最初とても親切にしてくれたが、ある時宗教論になり、大喧嘩になったこともあった。

【ボローニャのホームステイ先　同年輩の高校教師ジジ（ルイジ・リゼッレ）と】

●ボローニャ大学

10 月、ペルージャから北部のボローニャに引っ越した。ボローニャは、食道楽の町とも言われ、ボロニェーゼやラザニアがボローニャ発祥。また、赤い町と言われ、共産党が強い町。そして、世界（ヨーロッパ）最古の大学がある町。ボローニャ大学ではダンテ、ペトラルカ、ガリレオ、コペルニクスなどが学んだという。

私はそこで Corso Singolo（単科コース）に入り、イタリア語の試験を先ず受けた。イタリアは口頭試問が中心のようで、試験官の先生の前に留学生たちが一人ずつ呼ばれ、試験を受けた。一つは、イタリア語の小説を読んでそこに何が書いてあったか要旨の質問をされた。これはなかなか難しくよくわからず、まともに答えることができなかった。その後、今度は会話のテストで色々な質問を受けた。「ボローニャの生活はどうですか？」と尋ねられた時、「ボローニャの平打ち生パスタのタリアテッレが好きで日に二度食べています」などと答えたら、先生が大笑いしてくれて、結果、20 点満点で 16 点をもらって無事に講義を聴講することができた。

【ボローニャ大学文哲学部　記号論の授業の後
（右からヴィンチェンツォ、パトリーツィア・ヴィオリ先生）】

（つづく）

（日本基督教団牧師、当館受講生）

＊ローマで過ごした2月の週末＊

深草　真由子

イタリアの冬は天気がぐずつくことが多い。傘を持ち歩くのも服をぬらすのも嫌で、外出を避けがちになる私だが、2 月の最後の週末はローマで過ごすと前から決めていた。ラッキーなことに土曜も日曜も晴れマークがついている。キャリーバックに折りたたみ傘をつめる必要もなさそうだ。

2025 年はカトリック教会の聖年で、世界各地から巡礼者がローマに集まる。それでなくてもいつも観光客で混雑しているローマだが、今年は特に人が多いだろう。そう思って少し心配していたが、地下鉄オッタヴィアーノ駅から近く、夜でも安心して歩けそうな大通りにある宿を予約することができた。

聖年という教会にとって特別な一年は始まったばかりなのだが、ローマ教皇は体の調子がよくなく、しばらく前から入院中である。しかもこの週末は容態が悪化し、かなり緊迫した状況にあったようだ。ニュースでは、サン・ピエトロ広場や病院前で教皇の回復を願ってお祈りをしている人々のようすが映し出されていた。

週末を一緒に過ごすことになっている友人らと土曜のお昼すぎに落ちあったあと、まずは日本の洋菓子を出してくれるカフェでエネルギー補給をし（イタリアのドルチェに比べると甘さが控えめで、なかなか好評であった）、地下鉄でスペイン広場へ向かった。この日は決まった予定はないので、そこから歩行者天国になっているコルソ通りを南へ下り、パンテオンやナヴォーナ広場の周辺をぶらぶらしようということになった。名所やお店が多く、散歩するのが楽しいゾーンである。

途中で立ち寄った、イグナチオ・デ・ロヨラにささげられた教会の天井画は見事だった。アンドレーア・ポッツォという画家によるフレスコ画で、天井を見上げると、実際の教会の上にさらに別の教会がそびえたっているような錯覚にとらわれる。イエズス会の創設者であるイグナチオとその宣教師たちの活動を称える作品で、日本で布教を行ったフランシスコ・ザビエルの姿もあった。

【ポッツォ作『聖イグナチオの栄光』】
出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Chiesa_di_SantIgnazio_di_Loyola_in_Campo_Marzio

トレヴィの泉はこれまでにも何度か訪れたことがあったが、日が沈み、ライトアップされたところを見たのは今回が初めてだった。真っ白の大理石が闇に浮かびあがり、幻想的でとてもきれいだった。多くの人はここでアニータ・エクバーグとマルチェッロ・マストロヤンニが演じたあの有名な場面を思い描くのだろう。私はというと、『甘い生活』ではなく、Achille Lauro が歌う *Incoscienti Giovani*を思い出してうっとりしていた。ちょうど今イタリアでヒットしている曲（名曲！）なのだが、フェッリーニへのオマージュとなっているそのミュージック・ビデオの中で、若い恋人たちがトレヴィの泉に入る、これまた美しいシーンがあるのだ。

土曜日ということもあってか、予約なしで入れるレストランを見つけるのに苦労したが、ローマ料

理のトラットリアで美味しいアマトリチャーナとローマ風アーティチョークをいただくことができた。次の日はいよいよ、待ちに待ったヴァチカン美術館である。今夜はしっかり眠って、今日一日の疲れをとらねば。

毎月最後の日曜日は無料で入場できるためか、美術館目当ての人々がヴァチカン市国とローマを隔てる城壁にそって、開館前から長い列をつくっていた。私たちは朝一番に入れるように、公式ガイドによる案内付きのグループツアーを予約していた。

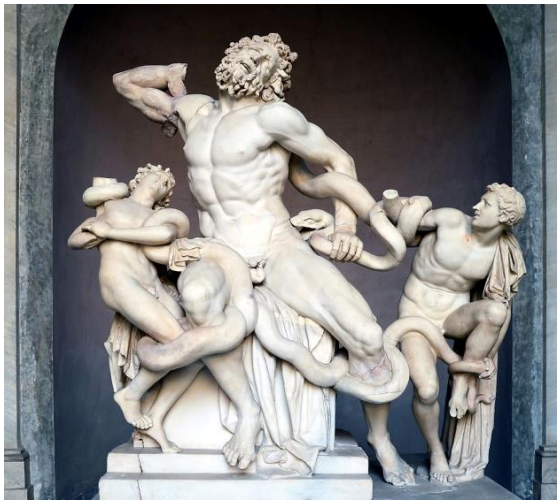
ツアーは 3 時間半から 4 時間ほど続いただろうか。入場してすぐ、美術館そのものと（内部で静粛にすることが求められる）システィーナ礼拝堂についてのレクチャーを半時間ほど聞き、そのあとは広い館内を歩きつづけた。楽しかったので長くは感じなかったが、体力的にはなかなかハードである。別のことに少し気を取られているあいだに、グループからはぐれてしまうこともあった。ガイドの方は当然ながら「すばらしい作品をなるべくたくさん見てほしい」と思っていらっしゃるのだろう。時間は限られているから、進むペースはどうしても早くなってしまう。

それだけここのコレクションは充実しているということだ。ヴァチカン美術館はイタリア語で Musei Vaticani と複数形で呼ばれるように、博物館や美術館、図書館など複数の施設が集まってできている。エジプトやエトルリア文化の博物館もおもしろそうだし、近代・現代美術館にはファン・ゴッホがめずらしく宗教を題材にして描いた作品もあるらしいが、見に行く余裕はなかった。絵画館の一室に飾られているレオナルド・ダ・ヴィンチの『聖ヒエロニムス』でさえ、私たちのグループはろくに見もせずに、前を素通りしただけだ。

以前にヴァチカン美術館を訪れた時にもおそらく見てはいるのだろうが、今回ガイドの方の案内のおかげで改めて「発見」することになり、印象に残ったものの一つはピオ・クレメンティーノ美術館である。このセクションにはギリシャ・ローマ時代の彫刻が展示されている。

中でも目を引いたのは金色に輝く大きなブロンズ像『ヘラクレス』だった。十九世紀にローマのポンペイウス劇場跡で発見されたものである。古代ローマの人々は雷に打たれて倒れたこの像を不吉なものと考えて恐れ、地下に埋めたのだそうだ。ガイドの方も言っていたように、今私たちが目にすることのできる古代ブロンズ像は、このヘラクレス像のように地中か、あるいは（日本にも来たことのある）『踊るサテュロス』のように海の底で、何世紀ものあいだ眠っていたものしかない。古代に数多く作られたブロンズ像のほとんどは中世になって破壊され、武器などに形を変えられたからである。『ヘラクレス』は今では百体程度しか存在しないブロンズ像の一つであるうえに、金色の塗装もほぼ当時のまま残っているから、たいへん価値の高いものなのだろう。

鉢植えの樹に小さなオレンジの実がなる、自然の光に満ちた中庭には『ラオコーン像』があった。ラオコーンはトロイアの神官である。トロイア戦争の最中、トロイの木馬が城内に運び込まれるのに反対したため、敵方のギリシャ人を守護する神々アテーナーとポセイドンの怒りをかった。そしてその神々が送った海蛇に襲われ、二人の息子とともに絞め殺された。1506 年にこの大理石像がローマ市内のブドウ畑で発見されると、当時の教皇ユリウス二世はミケランジェロらにすすめられてそれを購入し、この中庭に運び入れた。これがヴァチカンの古代彫刻コレクションの第一号だということである。親子の体にしつこく絡みつく蛇のようすがいかにも気味わるく鳥肌が立つ。ラオコーンの叫び声がほんとうに聞こえてくるようだ。



【ラオコーン像】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Gruppo_del_Laocoonte

この中庭にはカノーヴァ作の『ペルセウスとメドゥーサの首』もあった。見る者を石に化す怪物の首を切り取り、それを左手で持ちあげている英雄を象ったものである。頭髪が蛇でできたメドゥーサ

の頭がいかにも重そうだ。ペルセウスの手からぶら下がるその大理石の塊が落下したり、像全体が傾いて倒れたりしないのが不思議である。カノーヴァは芸術家としての偉業はもちろん、ナポレオンがパリに持ち去ったヴァチカン所蔵の作品を、交渉してローマに持ち帰るという難しい仕事を無事にやりとげたという理由からも、この美術館の歴史にとってたいへん重要な人物だということである。

【カノーヴァ作『ペルセウスとメドゥーサの首』】
出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Antonio_Canova

修復が終わったばかりのピントゥリッキオの壁画で飾られたボルジア家の居室、そしてラファエッロの『アテネの学堂』などを見学したところでツアーは終了した。ガイドの方と別れ、クライマックスのシスティーナ礼拝堂へ向かって歩いているときには、初めてではないにもかかわらず、さすがに気持ちが高ぶった。礼拝堂はペルジーノやボッティチェッリらによって精密に描かれたモーセとキリストの生涯の物語、そしてミケランジェロによる『最後の審判』、神による世界の創造から人間の堕落までを描いた『創世記』、そして預言者と異教の巫女シビュラたちの今にも動き出しそうな姿で飾られている。一つ一つの画がすばらしいことはもちろんだが、ルネサンス美術の傑作で隙間なく埋め尽くされているその場の雰囲気に圧倒され、息をのんだ。

閉館時間を告げるアナウンスに促されるようにして礼拝堂を出た。テルミニ駅で遅い昼食をとり、各々が帰路についたところで、楽しかったこの週末はおしまい。まだしばらくは感動の余韻にひたっていようと、美術館のブックショップで買った本を片手に、レッジョ行きの高速列車に乗り込んだ。

（元当館スタッフ）

＜春の無料体験レッスン＞

4 月からの新学期に先だって、無料体験レッスンを開催いたします。ご参加お待ちしております。

●イタリア語無料体験（初心者向け）
京都本校：　4 月 2 日（水）13:00
　　4 月 5 日（土）11:00

ウィングス京都：3 月 31 日（月）19:00

大阪梅田校：　4 月 3 日（木）19:00

●イタリア語無料カウンセリング（経験者向け）
京都本校：　4 月 5 日（土）14:00～

●スペイン語無料体験（初心者向け）
京都本校：　4 月 8 日（火）15:30

編集・発行 / **（公財） 日本イタリア会館**
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL：（075）761-4356/FAX：（075）761-4357
E-mail：centro@italiakaikan.jp
URL：http://italiakaikan.jp/